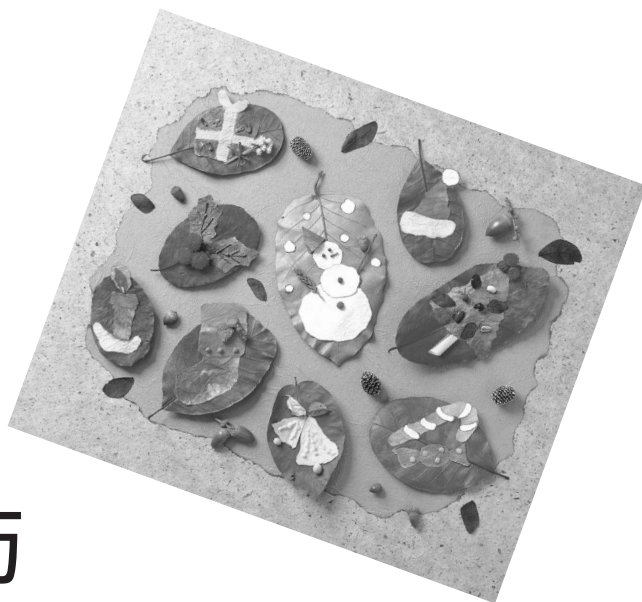




がん予防

21世紀もまもなく10年目を迎えます。保健医療の分野では、この10年で「がん」の存在感が一層高まりました。平均寿命の伸びも影響していますが、生涯のうちで日本人の2人に1人ががんに罹り、3人に1人ががんで亡くなる時代を迎えているのです。

このような中、わが国では「第3次対がん10か年総合戦略」(2004～2013年)が展開中です。この戦略は、「がんの罹患率と死亡率(いずれも年齢調整指標)の激減」を目標の1つとしています。これに同調して2007年4月施行の「がん対策基本法」においても、「国および地方公共団体は、…がんの罹患率及びがんによる死亡率の低下に資する事項についての研究が促進され、…その成果が活用されるよう必要な施策を講ずるものとする」(第18条)と定め、国および地方公共団体に対して、がんの罹患率と死亡率の減少につながるような研究および予防施策の推進を強く求めています。

ところで、がんの原因は多因子性です。罹患する臓器によって遺伝子の関与が明らかなものもあれば、生活習慣(喫煙など)の影響が強いものもあり、1次予防は簡単ではありません。しかし、子宮頸がんのように、ウイルス感染が主因であることがわかり、ワクチンによる1次予防の道が見えてきたものもあります。また、がんの2次予防(各種がん検診)についても、検診効果の評価等に関する研究が進み、エビデンスに基づく新しい検診方法の実用化に期待が寄せられているものもあります。

しかしその一方で、老人保健制度が改廃され、メタボリックシンドロームの概念を導入した特定健診・保健指導が開始された影響は大きく、がん検診の受診率は逆に低下している市町村が目立ちます。また、医療の高度化等に伴う医療被曝の増加、あるいは携帯電話等の普及に伴う高周波電磁波への曝露と発がんリスクとの関連を心配する声もあります。

そこで本特集では、がんの1次予防と2次予防に着目し、がんの罹患率と死亡率の減少に寄与することが期待されている研究や施策等を紹介していただくとともに、がん予防の「影」の部分についても今後の課題として取り上げ、関心を高めていただきたいと思います。